

人・街・ながた 震災資料室ニュース

2008. 9. 17

発行人 寿 広文

編集人 武川泰恵・藤原美紀

真陽小の震災資料、整理・分類へ 自治労長野の聞き取り調査がキッカケ

9月24日(水)、資料室・神院大水本ゼミの数名で真陽地域福祉センターを訪れた。キッカケは8月に行った長野県飯田市での聞き取り調査だ。この時の話の中で「飯田市三穂地区と真陽地区は震災での支援をきっかけに現在も年2回互いに訪問し、交流を続けている。真陽地区では震災当時から資料を保管されている」と伺ったからだ。

センター4階の事務室に保管されていた資料は、9月24日時点での概数は、書籍ダンボール2箱、ビデオテープダンボール2箱、手紙36通、避難所でのチラシ・在庫調査等・飯田市からの調査感想文ダンボール1箱、H17・1・17避難者名簿「原本」ダンボール1箱だ。



しばらくの間お借りして、整理・分類を、神戸学院大水本ゼミと協働で行っていく予定だ。

最後に、お忙しい中お世話くださった真陽地区の柘植会長、ありがとうございました。

秋の震災資料室展のお知らせ

日時 11月21日(金)～26日(水)

9:00～17:00 (土日祝も開催)

場所 長田区役所7階区民ギャラリー

震災資料 自治労長野より寄贈された震災支援資料(真陽小学校)、避難所日誌、市民から寄贈された写真 ほか

共催/長田区役所、神戸学院大学水本ゼミ

長野聞き取り調査報告③

長野市社協 第3グループ(2月17日～24日)として参加された遠藤茂彰さんから当時の話を伺った。

社協の職員としてボランティア活動を推進していたこと、職場の仲間が震災後すぐに西宮に駆けつけたこと、仕事がうまくいっておらず、自分への変化を求めて等の要因が重なっての参加。

神戸に入ってから、ニュースや新聞で見ると「怖い」というイメージ。かなりの勇気を出さないと来ることはできないが、その一方で現実を受け止めないといけないという思いを持った。

寒い時期でもあったので弁当を温めてあげたかったが、電子レンジが職員室に1台しかなく、全員分を温めることはできないので、仕方なく冷たいまま食べてもらっていた。後での話になるが、同じグループで活動していた長野・鳥取・神奈川のメンバーで電子レンジを買い、職員室に寄付した。

当時27歳で同じグループの中では若い方であったが、現地責任者の顔見知りであったことから班長に任命されたと言う。班長の業務としては、自治会長のサポートや食事や物資の仕分け、避難所内の見廻り、ボランティアの受け入れ等...。その中でも引継ぎノートの記入は毎日のことでもあり、まとめて書こうと思うと忘れてしまうので、常にノートを持ち歩いては書き込んでいた。また、「何かしないといけない」と思いながらも、職員室しかいけないのは辛かった。

振り返ってみると、もっと被災者の方にも声をかけて交流を持ちたかったのだが、それも(裏面に続く)

大きく変貌する街・水笠通

4回の国勢調査を比較して⑨

1丁目は面積は2丁分あるが、水笠公園やグラウンドで1/3を占めていたので、人口は1990年で259人だった。全て宅地となり増えている。2丁目は全丁が公園になるので、いずれ0人になる。



3丁目は震災前は木造瓦葺の棟続きがビッシリと並んでいたが、区画整理事業で全ての住居が公道に面し、マンションも建てられた。また伝統のある神戸保育園も少し場所を移り新築された。

4丁目は山吉市場があった所で、鉄骨鉄筋13階建が建てられ、1階に店舗が入居した。

茨城キリスト教大学 稲垣ゼミ来室

毎年来られている稲垣ゼミが、9月3日から6日まで神戸合宿を行い、19人が学習をした。

学生のほとんどが社会福祉関係の職場を目指しており、質問も病院・障害者・子ども達・ボランティア・救援物資関係に集中した。

合宿では、野島断層・人と防災未来館・メリケン波止場などを見学された。



	1990年	1995年	2000年	2005年	05 90
世帯数	783	219	427	641	0.82
人口	2,044	602	1,137	1,565	0.76
1丁目	259	102	342	416	1.61
2丁目	387	115	83	30	0.08
3丁目	389	111	296	457	1.17
4丁目	279	177	63	277	0.99
5丁目	387	41	112	130	0.34
6丁目	343	56	241	255	0.74

5・6丁目は火災が起こり、最も悲惨な状況を呈した地区である。新しい街は自治会の公会堂も建てられ、昔の町並みが一変した。

(1面 市社協 の続き)

できなかった。応援の最終日に挨拶をすることになり、これまでも十分に頑張っている人たちに『頑張ってください』とは言えないと思い、『ありがとうございました』としか言えなかった。

「休息日はどうしていたか」という質問に対する答えの中で、「フィルム付カメラを買って写真などで記録しようと思ったが、被災者の気持ちを考えるとそれもできなかった。自分の目には焼き付けておこうと思った。」という言葉が強く印象に残っている。

遠藤さん、お忙しい中ご協力いただきましてありがとうございました。